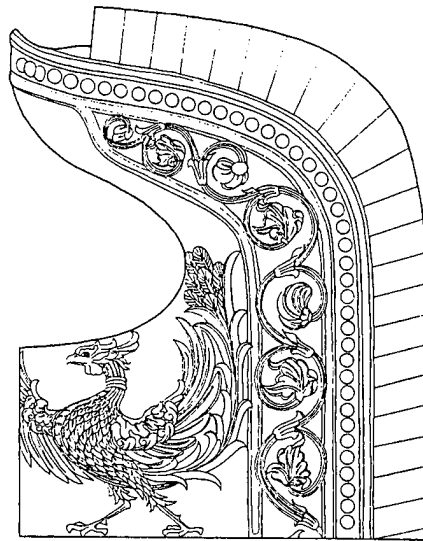


上ノ庄田瓦窯跡

発掘調査現地説明会資料



鷗尾復元図 『日本古代の鷗尾』から

2001年3月10日

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

上ノ庄田瓦窯跡

場 所 京都市北区西賀茂上庄田町
調査期間 2001年1月9日から現在継続中
調査面積 約1200㎡
調査主体 (財)京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

京都市北区西賀茂、ここには須恵器窯跡（6～7世紀）や出雲寺（7世紀）の瓦を焼いた蟹ヶ坂瓦窯跡など古代の多くの遺跡があります。

794年に平安京が造営されると、その役所などの建物の屋根に葺かれる瓦が大量に必要となり、西賀茂には多くの瓦窯（造瓦工房）が築られました。上ノ庄田瓦窯跡もその一つです。

上ノ庄田瓦窯は、1940年に木村捷三郎氏らによって窯跡の一部が発掘調査され、鳳凰文を浮き彫りした鴟尾が出土した窯跡として著名な遺跡となりました。

発掘調査は、区画整理事業に伴うもので1995年の第1次調査以来、第4次調査となります。1997年の調査では、京都市内で初めて瓦窯の工房部分（生瓦を作るための作業空間）の様子が明らかとなりました。今年度の調査では、2基の窯跡とその前庭部（窯焚きをするための作業空間）および灰原（窯から掻き出した灰の捨て場）が明らかになりました。これらの遺構の遺存状態はきわめて良く、当時の瓦窯の様子を良く伝えています。今回の現地説明会では、今までに調査した遺構を合わせて見学していただけます。

調査の成果

上ノ庄田瓦窯跡は、標高110m前後の賀茂川による河岸段丘に位置しています。遺跡は台地の上に工房が、段丘の東先端に窯が築かれています。今回の調査によって明らかとなったのは、3基の窯跡、2箇所の前庭部、灰原、排水溝などです。

1号窯 1940年に木村捷三郎氏などによって窯跡の一部が調査されています。窯の全長2.8m焼成室は長さ0.7m・幅1.8mで5条の分焰牀を設けています。

燃焼室は、長さ1.7m、最大幅1.8mを測ります。焚き口は、川原石と花崗岩を鳥居型に組んでいます。平安時代前期の瓦窯としては比較的小規模ですが、これは窯の内側に壁の修復を2回以上行った結果であり窯が築かれた当初は、もう少し大きかったようです。

3号窯 これも1号窯と同じ平窯です。全長約4m、焼成室の長さ1m・幅2.1mを測ります。燃焼室の大きさは、現在調査中でまだ明らかではありません。窯体内より窯壁となる瓦積みが出土しており、窯の天井部近くまでが瓦を積んで作られていたことが明らかとなりました。

SK44 この遺構は、1995年の試掘では焼土や瓦が多量に発見されたため瓦窯跡と考
え2号窯としました。1997年の調査では、遺構の性格を明らかにすることができず、SK44
としました。今回、底部まで掘り下げた結果、壁土や焼土は窯の構築物でなく投棄したも
のであることが明らかになり、窯跡でないことが判明しました。

しかし、窯と土壇との間隔が等間隔であり、平面形や深さは瓦窯と類似していることか
ら、窯を築こうとした痕跡ではないかと考えています。

前庭部 1・3号窯の焚き口の前面にあります。窯で瓦を焼成する際の作業場となるこ
ろです。共に全長約7m、幅約4mを測ります。前庭部の一番後ろには雨水溜の窪み
があり、その前には島状の高まりがみられます。窯から掻き出した灰層と焼土がここに堆積
し、その重なりから少なくとも5回以上、窯に火が入れられたことがわかりました。

灰原 前庭部の東側に認められます。この灰や炭は、窯から掻き出したものです。

SD1・SD39 排水溝。窯内に雨水が浸入するのを防ぐために掘られた溝です。大量
の焼き損じの瓦と焼土で埋められています。この溝が埋まった段階で、1997年に調査した
SD1と呼んでいる排水溝が掘り直されています。

出土した瓦

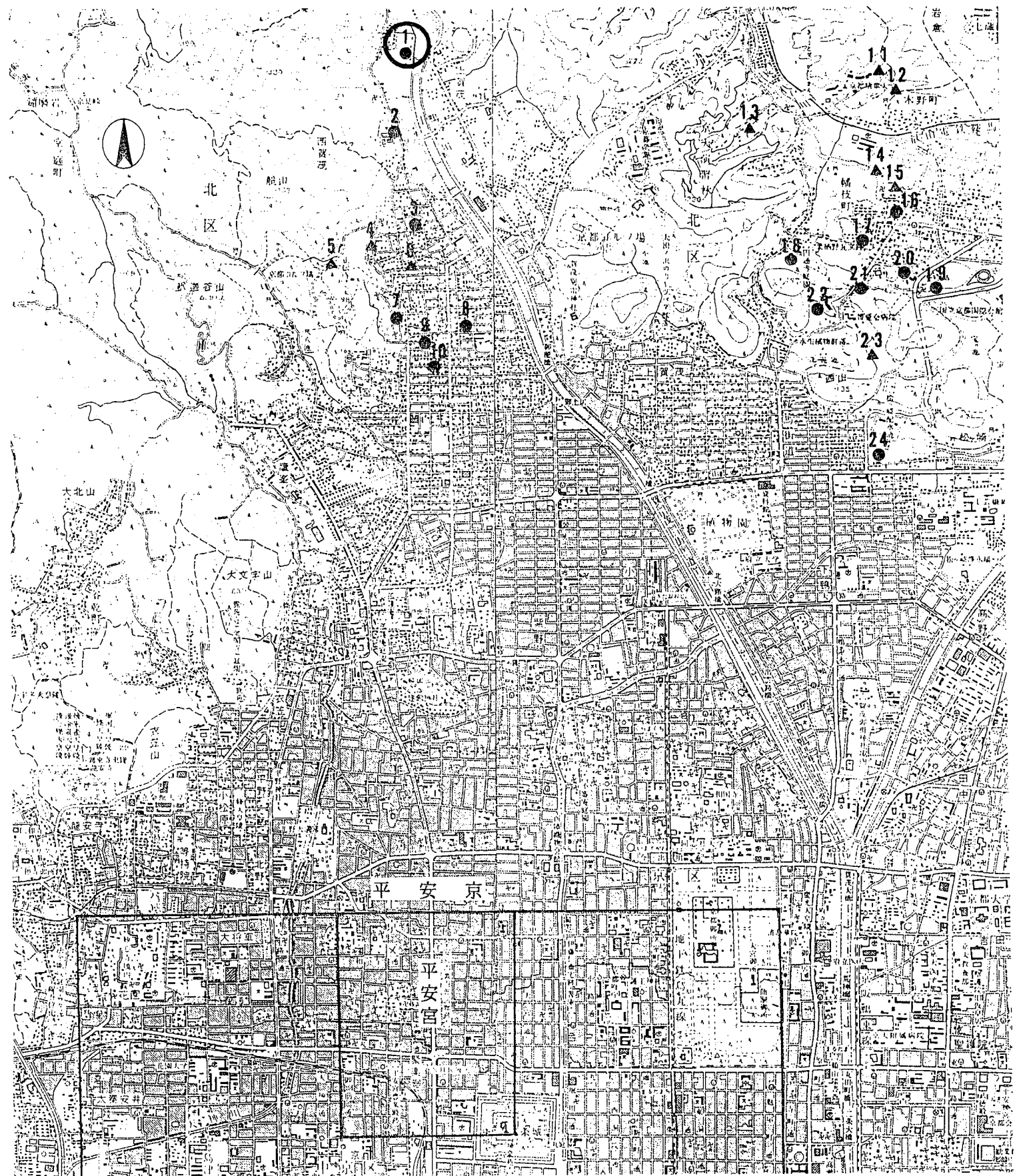
第1次調査から今回の第4次調査まで出土した瓦は、コンテナで1300箱を超えます。瓦
窯跡から出土する瓦のほとんどは、焼き損じたためにここへ廃棄されたもので、瓦作りの
難しさが伺えます。瓦の種類には、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、小型軒丸・軒平瓦、小型丸
・平瓦、それに鴟尾があります。鴟尾は、胴部に鳳凰の文様をリアルに浮き彫りしたもの
が出土しています。

まとめ

4回にわたって実施した発掘調査で明らかとなったいくつかの点を述べてみます。

- 1 平安時代前期に営まれた、窯跡と作業場を含めた造瓦工房（瓦屋）の全容が初めて
ほぼ明らかとなりました。
- 2 上ノ庄田瓦窯跡で焼かれた瓦は、現在のところ平安京や宮からあまり出土しません。
淳和院や雲林院など淳和天皇（在位823～832年）に関する離宮などからの出土があ
り、この頃が操業時期だったと考えられます。
- 3 1・3号窯は、窯から掻き出した灰層と焼土の重なりから少なくとも5回以上、操
業していたことがわかりました。
- 4 SK44（2号窯）は、今回の調査で瓦窯でないことが判明しました。

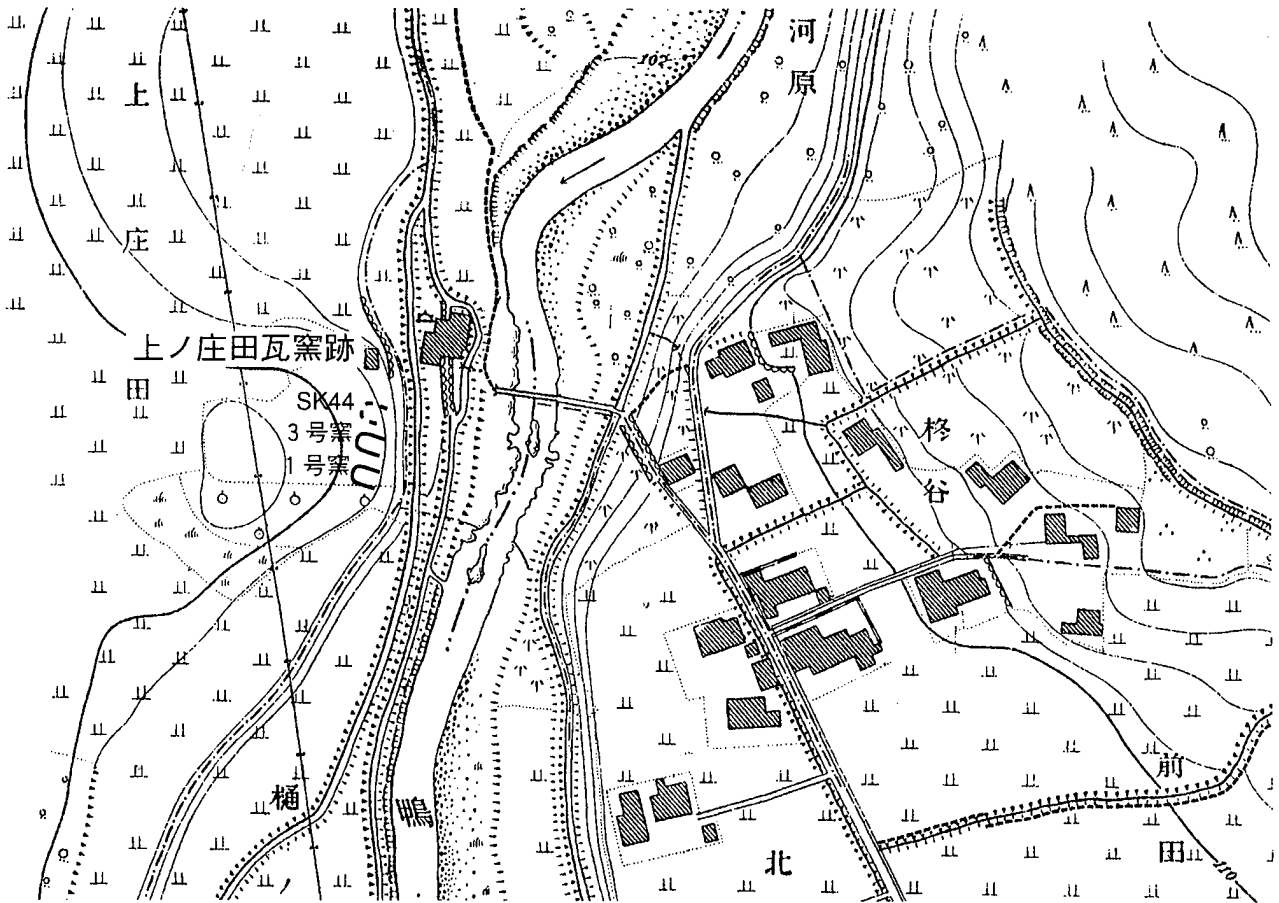
一般に平安京造営に伴う瓦窯の変遷は、大阪府吹田市の岸部瓦窯に始まり、そこから西
賀茂瓦窯跡群に移り、そして岩倉の幡枝瓦窯跡群に移るといわれています。上ノ庄田瓦窯
跡は、西賀茂から岩倉に瓦生産が移るその過渡期の瓦窯跡といえるようです。



京都盆地北部の窯跡と平安京 (1 : 30000)

- 1 上庄田瓦窯跡 2 蟹ヶ坂瓦窯跡 3 醍醐の森瓦窯跡 4 船山窯跡 5 正伝寺窯跡 6 大深町窯跡
 7 鎮守庵瓦窯跡 8 河上瓦窯跡 9 角社瓦窯跡 10 大宮北山ノ前瓦窯跡 11 中の谷窯跡 12 木野窯跡
 13 本山遺跡 14 妙満寺裏庭窯跡 15 妙満寺窯跡 16 元稻荷窯跡 17 栗栖野瓦窯跡 18 円通寺瓦窯跡
 19 木野瓦窯跡 20 南池田窯跡 21 南ノ庄田瓦窯跡 22 深泥池瓦窯跡 23 深泥池窯跡 24 芝本瓦窯跡

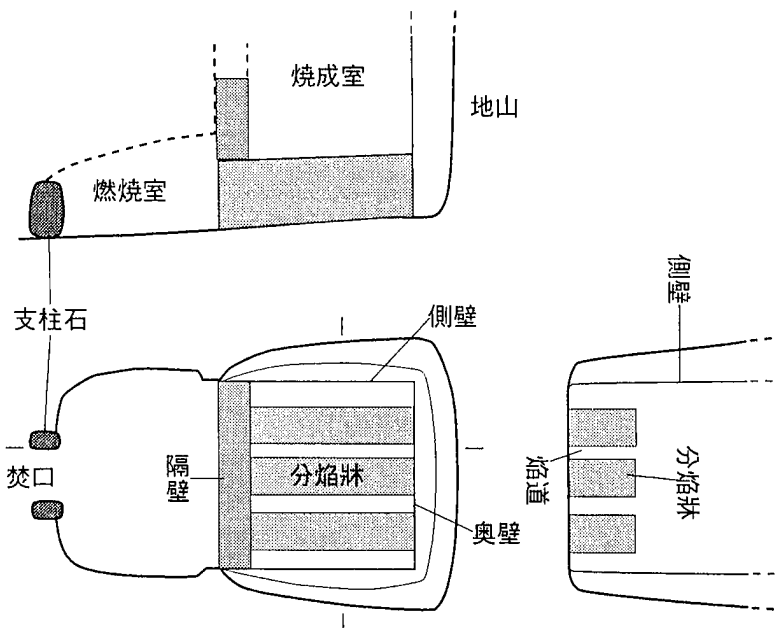
● 瓦の窯跡 ▲ 須恵器、緑釉・灰釉陶器の窯跡



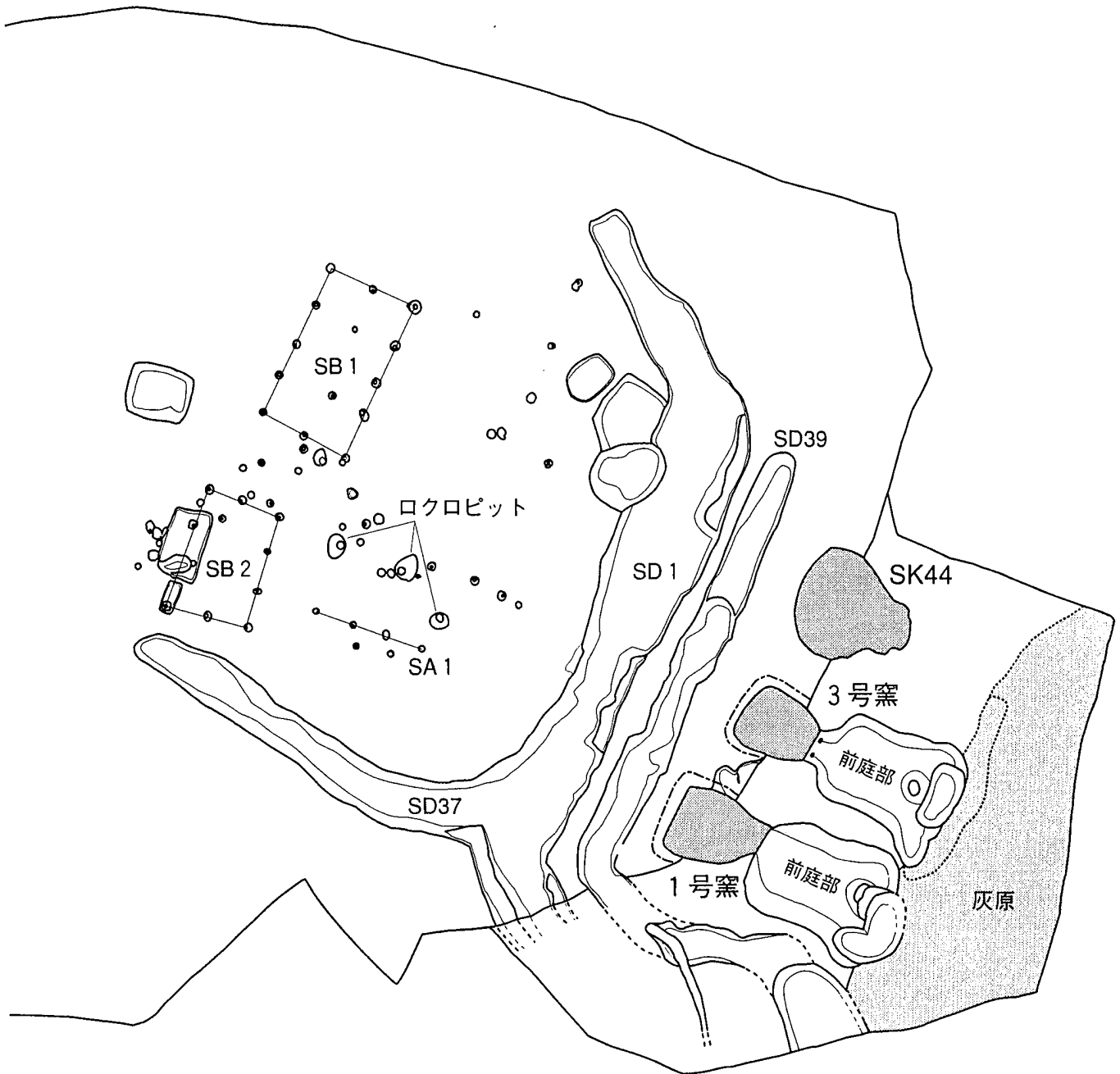
調査地位置図 (1:3000 大正11年測図の地図を使用)

ひらがま
平窯の構造

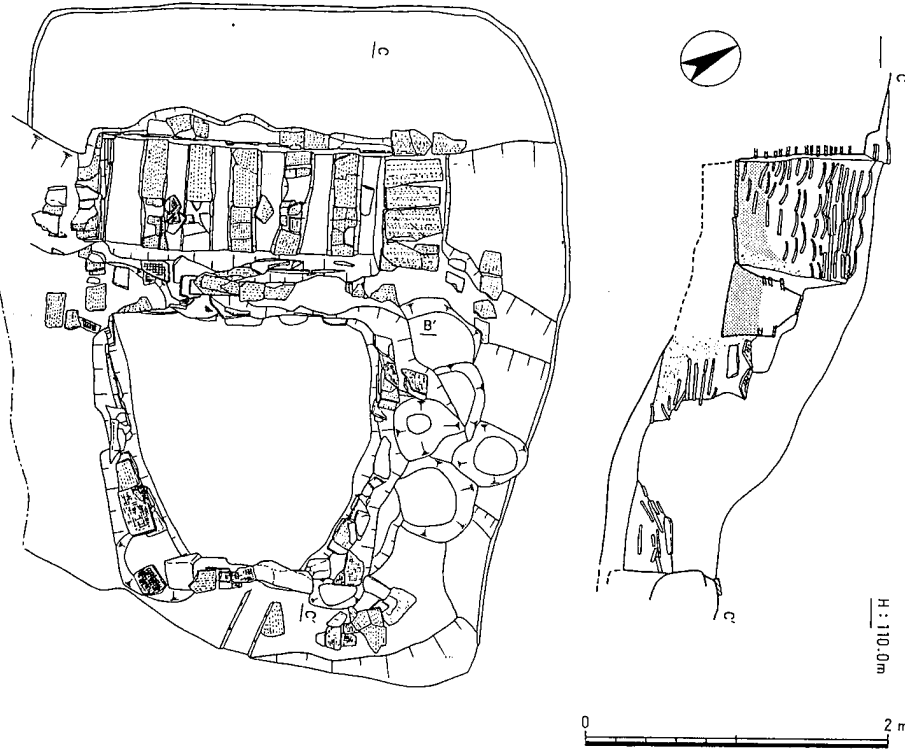
窯の構造は、燃料を燃やす^{ねんしょうしつ} 燃焼室と瓦を詰める^{しょうせいしつ} 焼成室に分かれ、共に瓦と粘土を積み上げて窯壁を作っています。焼成室の中には^{ぶんえんしょう} 分焰牀と呼ばれる瓦を置く畝があり、この間から燃焼室で燃やされた薪の熱が伝わってきます。燃焼室と焼成室の間は、^{うね} 隔壁と呼んでいる壁で区切られています。壁の下部は、分焰牀が焼成室から延びて、いくつかの小さなトンネルがあいているように見えます。



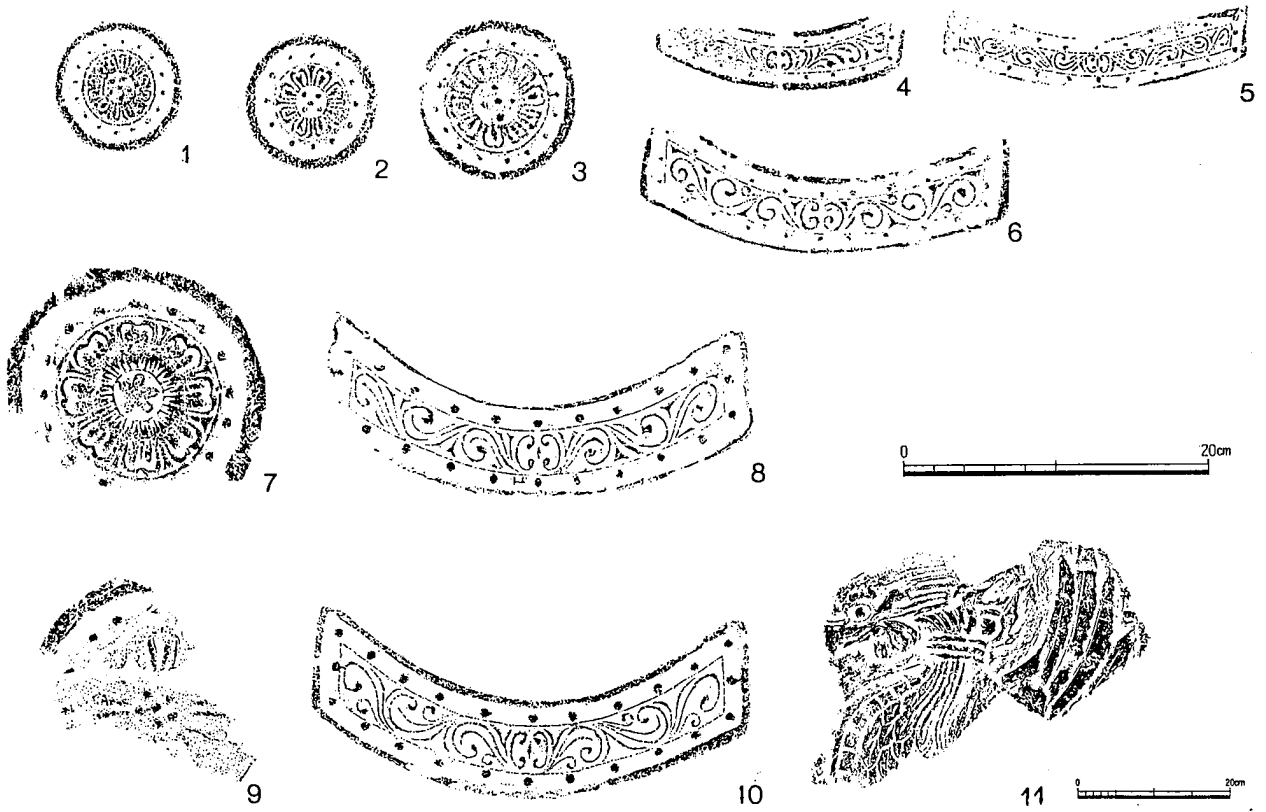
平窯模式図



遺構配置図 (1 : 300)



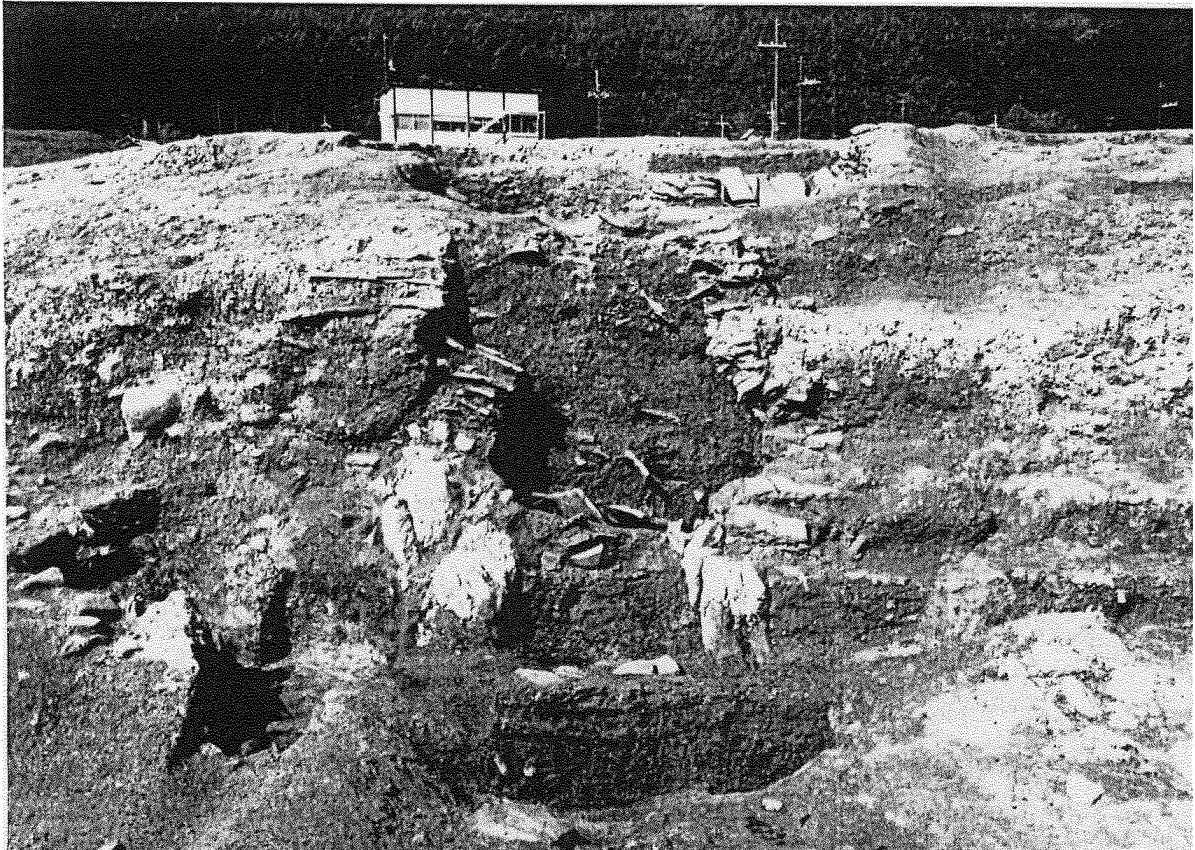
1号窯実測図



上ノ庄田瓦窯跡出土瓦拓影 (1~10はS=1/5、11はS=1/10)



1号窯と前庭部の瓦検出状況



3号窯焚口検出状況